

イギリス「国際旅団」の最後の挑戦

川成, 洋 / Kawanari, Yo

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大原社会問題研究所雑誌 / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

497

(開始ページ / Start Page)

67

(終了ページ / End Page)

76

(発行年 / Year)

2000-04-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009021>

イギリス「国際旅団」の 最後の挑戦

川成 洋

現在、イギリス全土で、国際旅団の記念碑や慰霊碑は、実に53ヶ所に建てられている⁽¹⁾。この運動は、地方自治体の協力を得て着実に拡大している。

もちろん、これらの碑がすべて祝福されて建立されたわけではない。

たとえば、1980年2月23日、スコットランドのグラスゴーのクレイド河畔のカスタムハウス岸壁で、イギリス国際旅団協会グラスゴー支部による慰霊碑の除幕式が行なわれた。2月25日付の『モーニング・スター』紙は、この除幕式を次のように報道している。

The International Brigade volunteers who fought fascism in Spain over 40 years ago were honoured in a lasting tribute by the city of Glasgow at the weekend.

A statue of Spain's anti-fascist heroine, Dolores Ibarruri — “La Passionaria” — was unveiled by the Glasgow's Lord Provost David Hodge before 400 people at Custom House Quay in the city centre on the river side.

Mr. Arthur Dooley's sculpture shows La Passionaria's defiant arms out-stretched to the sky and the inscription carries her famous words to the Spanish people when Franco generals rebelled against Spain's newly elected government in 1936: “Better to die on your feet than to live forever on your knees.”

In the crowd were over 40 members of the British Battalion of the English-speaking 15th Brigade, one of the five international volunteer brigades which fought at the side of the Spanish Republican army.

Prominent among the war veterans were battalion commander Bill Alexander and former transport union general secretary, Mr. Jack Jones.

Two banners were on display — the International Brigade Association banner and the Glasgow roll of honour banner containing the names of 65 Glasgow men who fought and died in Spain between 1936 and 1938.

The occasion was both emotional and uplifting for the many veterans and representatives of Scottish Labour, trade union and progressive movements who attended.

(1) William, Colin. & Alexander, Bill. & Gorman, John. *Memorials of the Spanish civil War*, Alan Sutton Publishing, 1996, pp.2-3.

Mr. Jones said Glasgow was due great credit for erecting the memorial. "New generations can look upon it and understand what it was all about."

Mr. Alexander said 437 brigaders — including 300 from Glasgow — left for Spain from Scottish addresses ; it was therefore extremely appropriate the memorial should be erected in Glasgow.

The International Brigade was a living example of how working class people had the ability to lead, he said. The working class had the ability to do anything history demanded. ⁽²⁾

だが、同じく2月25日付の『ガーディアン』紙によると、この除幕式は二人の保守党市会議員に妨害されて、一時ストップするというハプニングが起こったという⁽³⁾。

果せるかな、というべきか、1992年にロンドンのジュビリー・ガーデンズのイギリス人大隊の記念碑も、何者かによってハンマーで傷つけられた。幸いにも損傷箇所が致命的でなかったために、直ちに修復されたものの、この種の損傷行為を事前に防止する術はあるまい。

(2) The Morning Star, 25 February 1980.

〔私訳〕

40年以上も前にスペインでファシストと戦った国際旅団の義勇兵たちを讃えて、今週末、グラスゴーにおいて記念碑が建てられた。

クレイド河畔のカスタムハウス岸壁で、400名の列席者を前にして、スペインの反ファシズムのヒロイン、ドロレス・イバルリ — “ラ・パショナリア” — の立像がグラスゴー市長、ロード・ディヴィッド・ホッジによって除幕された。

アーサー・ドーレイ氏制作の立像は、ラ・パショナリアの何ものにも動じない両腕が天に向かって伸びている。そして、下のプレートには、1936年の選挙で樹立されたばかりの政府に対して、フランコ將軍たちが軍事叛乱を起こした時に、スペイン人民に抵抗を訴えた有名なことば — 膝を屈して生きるよりは立って死にましよう — が刻まれている。

列席者の中には、スペイン共和国軍の戦列で戦った五個国際旅団の一つ、第15国際旅団イギリス人大隊の46名以上の元義勇兵も混じっていた。

元義勇兵の間で最も重要な人物は、大隊長のビル・アレクサンダー、それに前交通運輸労働組合書記長のジャック・ジョーンズ氏である。

二本の旗が掲げられた。国際旅団イギリス人大隊旗、それにもう一本、1936年から1938年の間、スペインで戦い倒れたグラスゴー出身の65名の名前が記入されているグラスゴー記念旗である。

除幕式は、参列した多くの義勇兵、スコットランド労働党、労働組合、それに進歩的な運動などの代表者たちにとって、実に感動的であった。

ジョーンズ氏は、この記念碑の建立にあたってグラスゴー市に大いに感謝しなければならないと述べ、「若い世代の人々はこの記念碑を見ることができ、これがいったい何を意味するのかを理解することができる」と締めくくった。

アレクサンダー氏は、スコットランドから437名の義勇兵 — グラスゴーからの300名を含めて — がスペインへ馳せ参じた。それ故、ここグラスゴーで記念碑を建立するのは最もふさわしいのである、と述べた。

さらに続けて、国際旅団は、労働者階級がいかにして先頭を切って進むことができるかの生きた見本であり、労働者階級は、歴史が要請するいかなることも実行しうる能力がある、と述べた。

それどころか、もっと深刻な事態が発生したのである。わたしが1993年度のイギリス国際旅団協会の年次総会（2月15日、ハラマ河の初陣を偲んで、毎年2月中旬の日曜日に開かれている）に出席して分かったのだが、ジュビリー・ガーデンズが、地下鉄ジュビリー・ラインの延長に伴い、一部分ミニ開発され、政府によってホテル用地として売却されることになった。買い手は、何と、日本の有名な大手ディベロッパーであった。売却されれば、イギリス人大隊の記念碑も移転させねばならず、もちろん移転先は、そう簡単に見つかるはずがない。この反対運動をどう展開していくかが、総会の重要議題の一つとなっていた⁽⁴⁾。それが議題となったとき、正直なところ、わたしは身の置き場がなかった。あとで、アレクサンダーが近づいてきて、軽くわたしの肩に手を置いて、「君は気にするな、いろいろな日本人がいるのだから。われわれも十分にそのことを承知している」と言ってくれた。

それにしても、日本の大手ディベロッパーの事業は何とも許しがたい暴挙である。日本中の土地を買いあさり、それでもまだ不足なのか、その貪欲な触手をはるかイギリスまでに伸ばしてきたのだ。あろうことか、この高潔にして勇敢な老人たちの記念碑までも蹴散らかすような、札束で横断面を張り飛ばす日本式地上げが行なわれようとしていたのだった。日本人の一人として腹立たしいと言すべきか、恥ずかしいと言すべきか、わたしは、いつとはなく寡黙になったのである。

それから4年、1997年の夏。

わたしは、マルクス記念図書館でアレクサンダーに会った。

言わずもがな、日本経済のバブルがはじけ、例の大手ディベロッパーも倒産の憂き目にあい、ジュビリー・ガーデンズのホテル建設も中断されてしまい、イギリス人大隊の記念碑を移転させる心配もなくなった。

晴れた日だった。マルクス記念図書館から散歩がてらに、近くの公園に向かう途中、アレクサンダーはロンドン大学経済学部から依頼されて国際旅団史を博士論文の研究テーマとしている若い研究者のスーパーバイザー（指導教官）をしているので、とても忙しいと話してくれた。自分たちの足跡を歴史に刻印しなくてはならないと常日頃言っているアレクサンダーからすれば、この新しい仕事は、もっとも彼らしい最後の使命なのかもしれない、とわたしは思った。

ところで、少しさかのぼるが、1992年の晩秋、アレクサンダーが、ケンブリッジ在住のフリーダ・ナイト（Frida Knight）という女性を紹介してくれた。彼女は、彼の言っていた通り、82歳と

(3) The Guardian, 25 February 1980.

〔私訳〕

グラスゴーのサー・デイヴィッド・ホッジ市長は、数人の保守党市会議員が行なった激しい妨害に言及して、「ファシズムに敵対して戦った人々を偲ぶこの慰霊碑に反対し、妨害してきた人たちは、すみやかに自宅に戻り、われわれがここで何を記念として偲んでいるかを知り、これからも静かにしてもらいたい、私はこう願うのである」と述べた。

通りの反対側には、保守党の市会議員ロス・マッケイが、二人の仲間と一緒に、この除幕式に抗議し、「もしわれわれが再び権力を把握するなら、私はあの碑を、恐らくクレイド河の中へ移す運動を始めるつもりだ」と大声でわめいていた。⁽⁴⁾

(4) 川成洋「歴史と化す国際旅団」『朝日新聞』1993年4月8日。

思えぬほど「とても鼻っ柱の強い、バリバリの女性闘士」というのが、わたしの第一印象であった。

ケンブリッジのジーサス・グリーンに接した、フリーダの大きなお宅へ伺ったのは、その年の12月末だった。初対面ということもあって、カメラとテープはいっさい使用させてもらえず、午後のハイ・ティーのあいだ、フリーダが一方向的に喋りまくる四方山話を楽しんだのだった。

翌93年1月末、ようやくアポイントが取れ、フリーダからじっくり話を聞くことができた⁽⁵⁾。

フリーダは、1901年、ケンブリッジの現在住んでいるこの家で生まれた。父親は、トリニティ・コレッジのフランス語・文学の教授で母親もニューナム・コレッジの第一期生だった。つまり、ケンブリッジでは、由緒ある「ユニバーシティ・ファミリー」といわれる家系である。1920年代後半から30年代にかけて、演劇と音楽を指導し、またプロデュースもした。この頃、社会的な面にも関心を抱くようになり、失業者の救援運動や人民戦線運動を手伝うようになるが、いかなる政党や政治団体にも所属しなかった。入会したといえば、レフト・ブック・クラブだけであった。

スペイン内戦期に「スペイン子供救援組織委員会」のメンバーとしてスペイン共和国へ救急車や医療品を送るための募金活動や情宣活動をしていたが、1937年6月末、自ら救急車を運転してスペインへ入国する。バルセロナで国際旅団の管理下の病院に救急車を預け、報道関係の仕事に就くため、パレンシアを経由して、「世界の首都」といわれたマドリードへ向かう。「文化擁護国際作家会議」に出席するためだった。

マドリードで「国際作家会議」に出席したり、激戦区だった「大学都市」と呼ばれるマドリード大学を見物したりした⁽⁶⁾。

途中で負傷した右腕が化膿したために入院したが、一向に治癒する兆しが見えず、しかもブルネテの戦闘で負傷兵が日増しに搬送されてきたので、やむを得ず帰国せざるをえなかった。わずか2週間のスペイン滞在であった。

帰国して、再び「スペイン子供救援組織委員会」の仕事を手伝い、救援金募金のために、児童合唱団を組織してイギリス各地で公演し、スイスのツェルマットまで旅程を伸ばし、それなりに成功した。その後、フランスに亡命してきたスペイン人難民の窮状がはっきりしてきたために、1938年11月、ロンドンに「スペイン難民救援委員会」という組織が設置され、彼女もそれに加わった。ベルピニャンで独自の収容所を設置し、さらに1939年2月、メキシコ行きの船を何とか工面し、メキシコ行を希望するスペイン人難民を乗船させたのである。

その後、そのままフランスに残り、知り合いの家でのんびりとフランス語会話の習得を兼ねて下宿していると、第二次大戦が勃発した。やがてフランスの報復とドイツの占領が始まる。フリーダも「スパイ容疑」のかどで逮捕される。警察署から収容所に移される。いろいろな収容所を転々とさせられるうちに、イギリスに戻ろうと脱走を企て、それに成功する。その体験記『暁の脱走』

(5) 川成洋「フリーダ・ナイト覚書」『スペイン現代史』第9号、1995年5月5日、122-135頁。

(6) Fyrth, Jim. and Alexander, Sally. eds. *Women's Voice from the Spanish Civil War*, Lawrence & Wishart, 1991, pp.285-7.

（*Dawn Escape*）⁽⁷⁾を1943年に出版した。

戦後、フリーダは、社会的な問題に以前と同様、積極的に関わりながらも、本格的な音楽の研究に専念し、何冊かの著書を上梓した。その一冊は、わが国で翻訳されている。『ベートーヴェンと変革の時代』⁽⁸⁾という本である。また、高齢にもかかわらず、『モーニング・スター』紙の書評を担当しているという。

わたしとの対談は、おそらく、6時間くらいだったろうか。途中で何回かブレイクをとり、お茶を飲みながら雑談に花を咲かせたりした。その雑談の最中に、ジョン・コーンフォードの弟のクリストファーから彼女に電話がかかってきた。わたしも懐かしさのあまり、彼女の後に受話器を握った。実に15年ぶりの電話での再会（？）であった。彼は心臓が悪く、近く入院することになっているとのこと、再会を期して受話器を置いた。コーンフォード家も、父親がトリニティ・コレッジの教授であり、いわゆる「ユニバーシティ・ファミリー」であり、ナイト家というより、彼女の実家のステュワート家とは非常に親しい間柄であった。今でもこうして行き来があるという。フリーダにジョンの印象を尋ねたところ、「ジョンはとてもハンサム・ボーイだった」とにっこり笑い、ジョンが「マゴット・ハイネマンに」という詩を捧げた恋人、ハイネマンも昨年（1992年）10月に肺癌で亡くなった。最後はとても苦しそうだったという。あの気丈な、ゴリゴリの共産主義者の社会学者も、泉下の人となってしまったのか、というのがわたしの感慨であった。

そのフリーダも、1996年10月に亡くなった。その一カ月後の11月6日付の『ガーディアン』紙はこう報じている。

Frida Knight, a British volunteer, died five weeks ago, aged 85, with the memory of a Spanish love still fresh in her mind. She went to Madrid in 1937 and worked as an interpreter and journalist. Her ashes were scattered, and as she had wished, at the foot of a bridge, the Puente des los Fraceses, while her former brothers in arms sang the Internationale.

Rummaging among her possessions, her granddaughter found a book of Lorca's poetry with some faded violets tucked inside, a yellowing picture of an officer, and a letter which described how he had fallen at the puente.⁽⁹⁾

(7) Stewart, Frida. *Dawn Escape*, Everybody's Books, 1943.

(8) Knight, Frida. *Beethoven and The Age of Revolution*, Lawrence & Wishart, 1973.

(9) The Guardian, 9 November 1996.

〔私訳〕

フリーダ・ナイト、かつてのイギリス人義勇兵は、5週間前に死去した。享年85歳。スペインへの愛のみずみずしい記憶をいまだ胸にいだきながら。彼女は1937年にマドリードへ赴き、通訳やジャーナリストとして活躍した。彼女の灰は、彼女の遺言に従って、プエンテ・デ・ロス・フランセセスの橋脚のところに撒かれ、そのあいだかつての戦友たちが腕をくんで「インターナショナル」を歌ったという。

彼女の遺品を整理していた彼女の孫娘が、数枚の色あせたスミレの押し花がはさまれているロルカの詩集、セピア色に変色した将校の写真、プエンテのところで将校がどのように倒れたかを述べている手紙などを見つけた。

実に、フリーダらしい潔い野辺送りではあるまいか。

こうした元義勇兵たち、あるいはその支援組織の人たちの内戦以降の足跡を辿りながらも、義勇兵以外でスペイン内戦に関わった文学者にも是非会ってみたいと思っていた。

そのきっかけとなったのは、1990年11月11日付の『サンデー・テレグラフ』(*The Sunday Telegraph*)紙の「スペンダー、フランコ将軍に敬意を表する」(*Spender Salutes General Franco*)という記事であった。

More than half a century after the end of the Spanish Civil War, a tablet has been unveiled in Madrid to the memory of five British writers who died fighting for the Republicans: Julian Bell, John Cornford, Christopher Caudwell (Christopher St John Sprigg), Charles Donnelly and Ralph Fox.⁽¹⁰⁾

Its promoters are the poet Sir Stephen Spender, who gave intellectual support to the Republicans, and David Lea, assistant general secretary of the TUC. Among those at the ceremony were members of the dead men's families, the British ambassador, Robin Fearn, and two British historians of Spain, Sir Raymond Carr and Lord Thomas of Swynerston.

(10) ラルフ・フォックス (Ralph Fox) 1900年3月、イギリス北部のハリファックス市に生まれる。地元のグラマースクールからオックスフォード大学へ進学した。それもオックスフォードのなかでは名門中の名門、モードリン・コレッジであった。フランス語と東洋語を専攻に選んだだけあって、在学中から外国語に関するセンスと翻訳の能力はずば抜けていたという。また在学中にソ連の革命とその影響について関心を持ち、「行動的理想主義者」となるとして、イギリス共産党に入党する。卒業した翌年の1922年、ソ連の反スターリン派に対するモスクワ裁判を傍聴する。以来、数回ソ連へ赴き、コミンテルン極東支部の専従職員などを経て、32年に帰国し、共産党中央委員に就任する。こうした八面六臂の多忙な政治活動のかたわら、『青年船長』(*Captain Youth: A Romantic Comedy for All Socialist Children*, Daniels, 1922), 『草原の民』(*People of the Steppes*, Constable, 1925)などを皮切りに、たとえば、『嵐の空』(*Storming Heaven*, Constable, 1928), 『レーニン伝』(*Lenin: A Biography*, Gollanz, 1933)など次々と文芸評論や社会評論を刊行し、左翼文壇で不動の地位を占めるようになる。

1936年12月初旬、国際旅団の戦列で戦うためにスペインへ赴き、創設されたばかりの第14国際旅団フランス人大隊イギリス人中隊付政治委員となる。12月26日のコルドバ戦線に初陣。28日払暁、イギリス人中隊は味方の作戦ミスのために多数の戦死者を出し、退却を余儀なくされた。彼は形勢を調べようとして戦死したと伝えられている。36歳であった。イギリス人中隊は戦死者を戦場に遺棄したままの総退却であった。彼のような「墓標のない戦死者」には、ジョン・コーンフォードも含まれる。

ラルフ・フォックスが戦死した翌年、マルクス主義文学理論書『民衆と小説』(*The Novel and the People*, 1938)など、3点が上梓された。

たしかに、彼の文芸評論家としての業績は、当然のことながらある程度まで「1930年代のマルクス主義」の産物であり、この点での限界は否めないかもしれない。しかし、彼の「行動的理想主義者」としてのひたむきな生き方は、いかなる賢しな批判をも越えて胸を打つであろう。

それ故に、と言うべきか、ハリファックス市の中央公園に、ラルフ・フォックスの名前入りプレートのパネルがある。そのプレートには、「ラルフ・フォックス、作家。自由のための人民兵士の友人」と記されている。(cf. Williams, Collin. & Alexander, Bill. & Gorman, John. op. cit., p.86-8.)

A heart attack prevented Spender from travelling to Madrid, but in his preface to the commemorative volume he makes a remarkable confession:

“Those who bitterly regretted the victory of Franco at the time, may, viewing Spain from the standpoint of 1990, have terrible doubts if they ask themselves the question of what would have been the consequences if the Republicans had won the Civil War a few months before the beginning of the Second World War, and with the rest of Europe soon to be subservient to Hitler’s Germany. Perhaps Franco - meeting with whom Hitler compared to the worst of visits to the dentist - provided the petty obstacle which, standing in the way of Hitler between the Spanish frontier and Gibraltar, and neutralising the peninsula, enabled European democracy to survive.”

Among the few poets to support Franco in the Civil War was the South Africanborn Roy Campbell, who much resented being called a fascist by Spender.

In 1949 the two poets waged their own Civil War. Spender was reading his verse at a meeting of the Poetry Society in Bayswater, when a drunken Campbell emerged from the audience, swung a punch at him and made his nose bleed.

“It happened,” Spender told me last week, “in the crypt of the Ethical Church.”⁽¹¹⁾

(11) The Sunday Telegraph, 11 November 1990.

〔私訳〕

スペイン内戦が終結して半世紀以上も経たマドリードで、かつてスペイン共和国の戦列で戦い、あえなく倒れた5名のイギリスの文学者――ジュリアン・ベル、ジョン・コーンフォード、クリストファー・コードウェル（クリストファー・セント・ジョン・スプリグ）、チャールズ・ドネリー、それにラルフ・フォックス――の慰霊碑の除幕式がとり行なわれた。

この慰霊碑建立の推進者は、共和国への知識人の支援を行なった詩人のサー・ステイブン・スペンダー、それにイギリス労働総同盟の副書記長のディビッド・リーなどである。この式典には、上記の文学者の遺族、ロビン・ファーン英国大使、それに2人のイギリス人のスペイン史家――サー・レイモンド・カー、ロード・トマス・スィンナートン――などが参列していた。スペンダーは、折悪く心臓発作のために参列できなかったが、記念パンフレットに、次のような瞠目すべき序文を寄せた。

「当時フランコの勝利に切歯扼腕した人たちは、1990年の時点からスペインを見た場合に、もし共和国が第二次大戦勃発の数月前に内戦に勝利したら、その後の展開がどうなるだろうかと自問して、ぞっとするのである。おそらくフランコ―ヒトラーが彼と会うくらいなら、歯科医院に行って歯を抜かれる方がましだと告白した―が、ちょっとした障害物を用意し、それによってスペイン国境とジブラルタルとの間のヒトラーの進路が妨害され、イベリア半島を中立化させ、ヨーロッパの民主主義陣営の擁護の立役者となったのである」

内戦期にフランコを支持した数少ない詩人の中に、南アフリカ生まれのロイ・キャンベルがいたが、彼はスペンダーにファシストと言われて、とても憤慨した。1949年、この2人の詩人は自らの内戦を戦った。バイスウォーターの詩人協会の例会で、スペンダーが自作の詩を朗読していた時、酔っぱらったキャンベルが客席から飛び出してきて、スペンダーにパンチを一発食らわせ、スペンダーは鼻血を出した。

「それは」とスペンダーは先週わたし（記者）に語った。「エセカル・チャーチの地下室で起こったのだ」

11月12日付の『ガーディアン』紙も、彼の意見を引用し、暗に彼の政治的変節を批判的に指摘したのだった⁽¹²⁾。

改めて言うまでもないが、スペンダーは、エクストロバートの文学の確立と文学者の社会参加を標榜する若い詩人集団「オーデン・グループ」(Auden Group)のW・H・オーデンと並ぶ指導的詩人であり、さらに28歳のときに出版した政治評論『自由主義からの前進』(*Forward from Liberalism*)⁽¹³⁾は、反ファシズムの立場を堅持しつつも、当時の正統左翼のスターリニズムへの批判も怠らない、評論家スペンダーの誕生を告げる画期的な労作であった。

スペイン内戦との関連では、スペンダーは、1937年1月、イギリス共産党のハリー・ポリット書記長と会い、入党に同意し、共産党機関紙『デイリー・ワーカー』特派員としてスペインへ赴いた。スペインでの活動は、かれの半生の自叙伝『世界の中の世界』(*World Without World*)⁽¹⁴⁾に詳述されている。だが、このスペイン滞在の隠された目的の一つが、ジミー・ヤンガー(Jimmy Younger)という若いイギリス人義勇兵を国際旅団から除隊させることであった。ヤンガーの除隊のために、あらゆる機関と折衝し、ついに共和国政府のアルベレス・デル・バーヨ(Julio Alvarez del Vayo, 1891-1975)外相に直訴し、成功する。折しも、マドリード近郊での首都攻防戦(ハラマ河の戦闘)が始まり、装備も訓練も不十分なまま初陣したイギリス大隊は、その初日に約3分の1の死傷者を出した。何故、ヤンガーの除隊にこれほど熱心だったのかーホモセクシャル説が有力だが。果せるかな、その一ヵ月後、帰国したスペンダーは共産党を離党してしまう。

帰国後のスペンダーの共和国支持の姿勢は変わらない。たとえば、すでに述べたように、1937年6月の「文士たちは味方する」(*Authors Take Sides*)のアンケートの発起人の一人となり、また翌7月のバレンシアとマドリードの両都市で開かれた「文化擁護国際作家会議」にイギリス代表として招聘されている。

ともあれ、「行動する共和国支持の詩人」スペンダーが、何故、前述したような発言をしたのだろうか。是非わたしは、その真意を聞いてみたいと思っていた。

ちょうど7年前の1992年8月12日、雨上がりの午後であった。わたしは女流作家アイリス・マードック(Iris Murdoch, 1919-1998)の紹介で、スティーヴン・スペンダー邸を訪ねた。ロンドン北部、年代がかった豪邸の立ち並ぶ高級住宅街の一隅に、彼の住まいがあった。玄関ホールに迎え出たナターシャ(Nathasha)夫人によると、彼は書齋で弟子の青年と仕事中心だという。

まもなく、スペンダーは応接間にやって来た。杖をついて、静かに、それにしても1909年生まれの彼は、思っていたよりも若々しかった。ただ、ソファに座ったとき、ズボンの裾から見える足が赤く異常にむくんでいるようだった。

スペンダーは、言葉をひとつひとつ選んで喋るもの静かな人だった。今やっている仕事は、もう年齢なので*Journals 1939-1983*(Faber & Faber, 1983)の続編と言うべき自叙伝を上梓するためにテープ収録とトランスクリプトをしているという。多忙な彼に感謝しつつ、さっそく例のスペイン

(12) The Guardian, 12 November 1990.

(13) Spender, Stephen. *Forward from Liberalism*, Left Book Club, 1937.

(14) Spender, Stephen. *World within World*, Faber & Faber, 1951.

内戦とフランコ将軍に関する発言の真意について尋ねた。それに対してスペンダーはほぼ次のように語ってくれた。

1990年夏、マドリード大学主催の文学講演会に講師として招かれ、マドリードへ行った。若い頃見聞した内戦期のスペイン共和国は、まさに「ピレネーの南はアフリカだ」という言葉通りの、貧しい後進国で、そのうえ、政治テロが横行するアナキーな社会だった⁽¹⁵⁾。誰も、どの政党もこのアナキーな社会を是正できなかったが、スターリンの後楯を得た共産党が、秩序回復、内戦勝利、ファシズム打倒を掲げて勢力を拡大し、他の政治勢力に弾圧を加え、ついに共和国政府を牛耳り、共和国は自己崩壊した。一方、内戦の勝利者フランコ将軍の軍事独裁体制に対する否定的評価、たとえば、スペインを「中世の異端審問の国」へ逆戻りさせてしまったなどといった評価にもかかわらず、彼は老獪な外交政策を駆使して、第二次大戦を辛くも回避し、内戦で疲弊した社会の回復と安定を最優先にした。それによって中産階級が増大し、ヨーロッパ社会への復帰（スペイン語でいう *europeización*）というスペインの長年の悲願を達成することができた。口で支離滅裂な理想主義を唱え、両手で政敵の首を締めるような共和国の指導的政治家には、フランコのような現実主義的な政治理念も能力もなかった。これについては、同様にスペイン内戦に関わった親友で、ともに講師として招かれたオクタビオ・パス（Octavio Paz, 1914-1998）も同意見であった。自分のフランコ観に関して、件の二紙の読者からなんの反論もなかった。明確な言い方ではなかったが、二紙が自分の言葉を引用するにあたって舌足らずな表現を用いた、というニュアンスだった。

さらにスペンダーとの話は、「オーデン・グループ」、J・ベル、J・コーンフォード、レフト・ブック・クラブ、A・ケストラー、オーウェルなどに移り、第15国際旅団イギリス人大隊が「詩人大隊」（*Poets Battalion*）⁽¹⁶⁾と呼ばれていたことにわたしが触れると、即座に彼は、この名称は全くの誇張であって、実際に詩人だったのはほんの一握りにすぎないと訂正してきた。わたしは敢えて反論はしなかったが、「詩人大隊」と呼称されたのは、最も没社会的で怯懦と思われる詩人が、イギリス人大隊のなかで最も勇敢な兵士だったという事実起因するのだろう。ちなみに、イギリス大隊長は、「戦闘のために多忙で詩も書けない詩人」のトム・ウイントリンガムであり、「内戦を歌った詩人」の「オーデン・グループ」の総帥オーデンは、担架兵として一週間ほど前線勤務して帰国し、スペイン内戦をテーマとして書かれた最良の詩といわれる「スペイン1937」を発表しただけで、その後内戦に関して一切沈黙してしまった⁽¹⁷⁾。

もちろん、スペンダーも同様に、「内戦を歌った詩人」に属する。

そのスペンダーも、1995年7月16日、86歳で逝去した。わたしにとって、忘れえぬ詩人であった。⁽¹⁸⁾

(15) この頃のスペインの信じ難いほどの貧しさについては、たとえば、内戦に参戦した詩人 Laurie Lee の少年時代の回想録、*As I Walked Out One Midsummer Morning*, Penguin Books, 1961.などが説得力をもつ。

(16) Gurney, Jason. *Crusade in Spain*, Faber & Faber, 1975, p.70.

(17) 川成洋「スペンダーとスペイン内戦、それ以降」『英語青年』1995年11月号、41-42頁。

(18) 川成洋「S・スペンダーの思い出」『毎日新聞』1995年7月26日。

締めくくるにあたって、フランコ叛乱軍側はともかく、共和国の戦列で戦ったイギリス人義勇兵のこうした途方もない愛他主義的行動をどう解釈すべきだろうか。

たしかに、共和国は敗北した。したがって、共和国側の義勇兵の参戦動機である「共和国の防衛」と「より大きな戦争（第二次大戦）の防止」の2点とも、成就できなかった。それ故に、いわゆる歴史の後知恵なるものを駆使して、彼らに賢しきな批判を加えるのは、いとも簡単であろう。

だが、一言付け加えておきたいのは、彼らは全く青写真やモデルを持ちえないまま、いわば手探りで、ひたむきに突き進んで行った。彼らの行動を過大に美化する必要がないのと同様に、過小評価し無視する理由もない。彼らをいつまでも「伝説」の世界のなかに閉塞させておけば、われわれは彼ら自身の歴史から何も学びとれないのではあるまいか。

彼らをつき動かしたのは、ジョン・コーンフォードが「ティエルの満月ーウェスカ攻撃をまえにして」のなかで歌っている、次の一節であろう。

O understand before too late

Freedom was never held without a fight.

Freedom is an spoken word

But facts are stubborn things.⁽¹⁹⁾

時代の大きな流れを少しでも変えようと身を挺した彼らの「愚直」な生き方を、歴史に刻印するのは、他ならぬわれわれの仕事なのである。

（かわなり・よう 法政大学工学部教授）

(19) Cunningham. ed. op.cit., p.132.

〔私訳〕

ああ、遅きに失せず悟れ

自由は闘わずして得られぬものを。

自由は語るに易しき言葉

だが、事実は手に負えぬ。